

岡山近代史研究の一課題

一神立春樹著『近代岡山県地域の都市と農村』を読んで一

在 間 宣 久

1 はじめに

岡山県地域の近代史を経済史の立場から明らかにする一書が刊行された。著者は、長年にわたり岡山県地域を対象として、その歴史的経緯を資料に即して追求する数々の論考を発表してきている。もとより私は、これらの論考についての的を射た書評なるものができる能力を持ち合わせてはいない。ただ、著者が丹念にしかも極めて精力的に追求する姿勢については、いつも感心して見ている者の中の一人である。そこで、ここでは著者の研究姿勢を含めて、近代交通史を研究する立場から本書を読み進めていくこととしたい。

2 内容の紹介

まず、本書はそのはしがきに述べられているように前著である『産業革命期における地域編成』⁽¹⁾に組み入れられなかったもの、およびそれ以後に執筆したものを集成してなったものである。そして、近代岡山県地域の都市と農村を解明すべく第1部都市、第2部農村の2部構成とし、以下のような9章立てとなっている。

第1部 都 市

- 第1章 明治前期における岡山区住民構成の再編
- 第2章 明治期の岡山市における商工業の展開
- 第3章 産業展開と市域編成一岡山市の場合一
- 第4章 第一回「国勢調査」における岡山市の住民構成
- 第5章 戦前期における倉敷市域の町村一住民構成からみた特徴一

第2部 農 村

- 第6章 森田文蔵(思軒)の描写した松方デフレ期の岡山の農村
- 第7章 地主制成立期岡山県備前東部地方の農業・農村事情
- 第8章 戦前期岡山県の一地主経営における地主・小作関係の展開
一岡山県邑久郡牛窓町服部和一郎家の場合一
- 第9章 明治後期の岡山県一農村における農村民の生活事情

さて、本書を読み進める前に、著者の研究への基本的な考えに触れておきたい。著者はいわゆる産業革命研究において、研究の目的は単なる産業編成替えの問題ではないとの考えを提示している。それは地域的な編成替えであり、また民衆生活の編成替えの問題であるとし、それを「産業編成論」「地域編成論」「生活編成論」と位置づけ、この三つの側面から統一的にその事態をとらえようと意図しているのである。それはすでに刊行された著書などによっても明らかであり、本書ももちろんその意図のもとにある。本書はその構成・内容からして、「生活編成論」に大きく関わるものであるといえよう。

そして、本書の特徴の第1は、各種資料とくに統計資料による精緻な検証がなされていること、第2は文学作品を素材とした検証を行っていることがあげられる。

第1部 都 市

ところで、人々の生活は産業の発展などによって変化するが、明治以降わが国の都市と農村は極めて大きな変化をみせた。地方史研究協議会では、1957年以降「村」から「町」をも含めた研究へと歩を進めている。1959年度

の大会報告記録をまとめた『幕末・明治期における都市と農村〈日本の町Ⅲ〉』⁽²⁾には、興味深い報告が収録されている。その中の一つ「明治期における都市の動向」で古島敏雄氏は、まず人口動態による検討を示した上で、政治・軍事・文化にもまして交通条件、工業発展などを含めた経済発展を考えることが、時代の特色を示す都市の動きをどこで捉えるかの研究の、一つの手掛かりとなることを提示している。また、同協議会は1978年度の大会報告等をまとめた『都市の地方史—生活と文化』を刊行した。それには都市史研究の視角から近代都市の形成と展開までを含めた内容が収録されている。とくに近代都市の形成と展開においては、愛媛県今治市、東京、京浜工業地帯を対象とした成果が掲載され、いずれも人口動態、工場立地等々の資料による経済的分析によって生活基盤である都市の形成過程について詳細な検討が加えられている⁽³⁾。

一方、本書の素材となっている岡山市の、都市としての発展を著したものに、『岡山県の地理』⁽⁴⁾及び『歴史の古い都市群・9—瀬戸内の都市』⁽⁵⁾などがあるが、いずれも地理学からの接近となっている。ただ、後者で「宇喜多氏以来の旧城下町『岡山』」を担当した芳賀修氏は、「地域の成長、発展の形態には都市の成立、原初形態、形成過程それに社会経済的活動の背景、交通体系などの地域発展の経過と深くかかわりあっている」と述べ、経済的側面からの分析の重要性を提示している。本書はこれらの提示に十分に応え都市を経済史的に捉えた好著となっている。

第1章から第4章までは、都市住民構成史ともいうべき内容となっていて、著者は第4章の「第一回『国勢調査』における岡山市の住民構成」をその中核にしている。ここでは、岡山市の職業別構成、世帯構成、出生地について、(1)本業者職業別構成、(2)本業者職業別中分類、(3)主要職業（中分類）における地位別本業者数、(4)主要職業（中分類）における地位別年齢別本業者数、(5)年齢別人口構成、(6)普通世帯・準世帯、(7)準世帯の内わけ、(8)未婚率、(9)出生地、(10)岡山市人口中他府県生の出生府県といった国勢調査結

果を集計した計10の統計表により、検討を行っている。その結果、岡山市は産業都市としては商業都市であり、都市手工業及び近代的工業の展開のもと人間往来・物流、行政の中心、教育文化の集中などが特徴的にみられる点を指摘している。これまで岡山県の中心的都市（県都）として認識されてきた岡山市を、経済的視点を据えて克明に解析しているのである。

この第4章に立ち至るまでの経緯が、第1章から第3章までに描かれる。つまり、第1章では、明治初期廃藩置県時には士族を3分の1とする3万人の岡山城下町が、制度的改革と1881年（明治14）からの松方デフレを経て、零細営業、力役の勞務者を圧倒的構成部分とする都市となったことを描く。その分析では、人口構成、士族・町方の職業構成、産業状況をもとに都市雑商の増加を把握し、士族の公債喪失や住民の地所・建物の売買・質書入れ、さらに物価・賃金等をもとにこの時期の生活困窮の実態が明らかにされる。こうした岡山区における多数の無産の人々の存在とその再編を詳細に論じた第1章は、以後の章の基礎となっており、本書にとって最も意義のあるものとなっていると私は考える。つづいて第2章では、従来の研究成果の検討のうえに、住民構成の基礎となる明治から大正にかけての産業展開をみる。まず初期岡山市の産業状況を押さえ、ついで経済状況の推移と会社・金融機関の設立、さらに物産移出入と商業、工業の展開、土木建築業へと論を進める。会社・金融機関では具体名が挙げられその消長が、物産移出入では消費都市及び物産集散都市岡山の鉄道駅と河岸との移出入分担が、工業では大きなウエイトを占める紡績工場と都市手工業の広汎な存在が、等々のように展開されていく。これらのプロセスは、第3章の1919年（大正8）の産業展開の分析へとつながっていく。これはもちろん第4章の前提としての意味を持つものであり、工業等の展開状況分析に加えて、市域の編成へとより突っ込んだ内容となっていくのである。第5章は、備中の工業・商業都市である倉敷及び周辺部の町村を取り上げ、その住民構成の特徴を導き出して、著者は次の第2部農村へとつなぐ役割を持たせている。分析の結果は、旧倉敷・玉

島・児島3地区そのものがそれぞれの特徴を持っているが、その中の町村でもその職業別構成、年齢別人口、配偶関係・未婚率、準世帯人口、出生地等の検討によって、およそ倉敷町は商業都市、味野・万寿村等は工業の展開する地区、粒江・福田・豊洲村等は農業地区といった具合である。つまり、同地区を構成するとはいえ、そこには産業の展開状況等の相違による特徴が表れているのである。

第2部 農 村

第6章から第9章までがおよそ明治期の農村を検討するものである。その素材はルポルタージュからいわゆる地主文書、さらに町村是にまで及ぶ。素材にルポルタージュを取り上げているのは、著者が開拓してきた「日本文学にあらわれた明治の農村」研究の一環であり、そのすぐれた着眼点を窺い知ることができる。著者はこれまでに、「蘆花徳富健次郎『みづのたはごと』における東京近郊農村」⁽⁶⁾、「島崎藤村『千曲川のスケッチ』における佐久の村々」⁽⁷⁾、「田山花袋『田舎教師』における北埼玉の農村」⁽⁸⁾などを著している。これらは東京近郊・佐久・北埼玉地方の農村事情について、その時代背景のもと地域の状況や人々の生活の状況を描き出した、きわめてすぐれた研究成果を提示することとなった。本書では笠岡出身のジャーナリスト森田思軒が著した明治18年の備前・備中南部地域のルポルタージュを素に、松方デフレ期の岡山県南農村住民の、極めて厳しい生活の実態が検証されている。このルポルタージュについては、すでに太田健一氏によって利用されているが⁽⁹⁾、著者は前著『産業革命期における地域編成』において、この松方デフレ期の岡山県における土地異動状況を分析し、その地域の特徴を把握したうえで利用・位置づけていることによって一層の利用価値を高めているのである。

つぎに第7・8章であるが、前者は地主制成立期の、後者は戦前期の農村事情について特に地主制とのかかわりにおいて追求している。これは、「近

畿型」農業地帯に分類される岡山県地域における地主制の事例分析の一環として、東京大学社会科学研究所の研究グループによる分析作業が進められ、著者もその一員として参加・執筆した時の基礎作業を論文にまとめたものである。その成果は『近代日本における地主経営の展開』⁽¹⁰⁾の中に効果的に取り込まれている。ここではまず「農事調査表」による岡山県農業の状況を把握したうえで、農家率が高く、近代諸産業の展開が見られず、交通網の形成からも外れた備前東部地域の特色を明確にする。このことが小作・地主関係にことのほか緊張を生み、それが後の小作争議を引き起こす誘因となることを導いている。こうした一連の歴史的流れを見据えた視点が、読者にダイナミックな展開を容易に理解させることとなっている。

そして、第8章では特に地主と小作の関係を、具体的な資料分析によって明らかにしながら論を進める。その中で西服部家が他の県南大地主などと違って、松方デフレ期の農民の没落を背景に貸金業を媒介としつつ片端しか土地集積を行っていったこと、したがって土地所有は広範囲にまたがり、かつ小作人数が多数であるという特徴を持つことになったことを指摘する。つまり、西服部家の小作人は幾人かの地主から「散がかり」的に小作地を入手し耕作することを余儀なくされていること、これら小作に対する管理は、中間的な管理・支配機構である名代制を採用しているが、名代人は世襲でもなくかつ担当権限も弱いこと、むしろ西服部家の直接的で強力な管理の実態が特徴として描き出されている。このことが地主・小作関係をことのほか緊張した関係としたのであり、西服部家の小作地をも対象とした「小作料永久3割減闘争」へと発展していくのであるが、その背景について西服部家資料によってはじめて明らかになって行くのである。

第9章では、産業革命研究の究極的課題はその進展に伴う民衆生活の実態の究明にあるとする著者が、「町村是」を素材にしてそれに迫ろうとするものである。「町村是」は、明治30年代から大正中期にかけて作成された実態調査書である。その調査結果をもとに町村の未来図を描き、その実現のための

年次計画を策定し実施しようとしたものである。

さて、著者は村是から計13の表を準備して論を進める。それは職業別戸数および営業戸数に始まり、主要品目消費支出高にまで及ぶ。これらにより土地所有・稲作反当収支・物産移出入等による生活基盤を押さえ、次いで株式・金融・負債、それに消費支出までにわたる村民の生活実態と生活様式の変化を読み取ることができている。さらに著者は山陰は島根県の大庭村との比較において、食生活・住生活などに表れる西高月村の近代化に伴う生活の変容を明らかにしているのである。町村単位での調査書である「町村是」は、民衆の生活実態によりせまるものであるが故にその資料価値は高く貴重である。しかし、残念ながらその残存状態は極めて悪く、ここに取り上げた『岡山県赤磐郡西高月村村是調査書』⁽¹¹⁾が、現在のところ岡山県では町村レベルでの唯一のものようである。

3 岡山近代史の一課題

以上、本書の構成に従っておよその内容を紹介してきた。本書において学んだことは多いが、何よりも著者の研究に対するスタンスを窺い知ることができたことである。研究の目的と課題とをきちんと整理し、資料的制約のもとにありながら、丹念にしかも精力的に資料分析に取り組むことが、研究の基本であることを示してくれていると思う。

また、ここに提示された図表はいずれも目的的に作成されたものであり、それらのすべてを文字通り駆使して、その特徴・意味合いを直接導き出しているのである。そして、文学作品のみでなくルポルタージュにまで及ぶ資料を用いるなどの歴史研究の先鞭を付けたことも特筆される。しかし、その使用に当たっての留意点にはもちろん厳しい条件が付されており、作品の著者がその地に住むなどその地を熟知していること、加えて著者自身がそこに住んでいる、住んでいたことがある、さらに調査などでよく知っていることを

基本条件として挙げている。

本書は都市と農村、それに近代化の中での民衆生活の実態を考える上での極めて示唆に富んだ材料を提示してくれた好著である。また、本書は岡山近代史研究会の「岡山近代史研究叢書」の第一輯として刊行されている。近代史研究を志し過去10年間にわたる活動を続けている私たちにとって、この叢書刊行の意義は大きい。はしがきにもあるように、この叢書が引き続き刊行されることが、研究会員の課題である。

最後に私の研究対象としている近代交通史の立場で、今後の課題を含めて感想を述べることにしたい。松方デフレ期に零細営業・力役の労務者を圧倒的構成部分とする都市へと変化をみせた城下町岡山は、明治20年代初めからの企業勃興期を通していよいよ岡山県の中心都市となっていった。この岡山市を中心とした産業編成が進んで近代的都市への変貌が実現されていくが、それを促進しその中核となったものが鉄道建設をはじめとする交通体系の近代化であろう。すなわち、岡山県下では山陽鉄道（明治24年）の開通を初めとして、以後中国鉄道（明治31年）、宇野線（明治43年）、西大寺鉄道（明治44年）、下津井鉄道（大正2年）等々が開通していった。わが国の鉄道は諸外国の鉄道と異なり、ごく少数の例外を除いてそのいずれもが物資輸送より旅客輸送の比重が大であるという特徴を持つ。このことは岡山県下の各鉄道においても例外ではない。こうしたことから交通体系の近代化によって、農村から都市への人口移動が容易となり、それが人口構成の変化を生む結果となったものと思われる。そこで、岡山近代史研究において都市と農村とを結ぶ交通体系近代化の検討が不可欠となろう。鉄道建設及びその経営と貨客輸送、瀬戸内港町の物資流通、車両交通の進展など近代交通史を研究課題としてきた私にとって、この課題に取り組む姿勢が問われており、その責務は重いと感じている。県南地域での検討はもちろんであるが、岡山県地域の交通体系近代化にとって大きな意味をもった、県北地域さらには中国山地を越えてのいわゆる陰陽連絡交通などの取りまとめを行うべく、現在鳥取県側等の

資料を基にその検討を開始したところである。

注

- (1) 岡山大学経済学研究叢書第4冊, 1987年, 岡山大学経済学部・御茶の水書房
- (2) 地方史研究協議会編, 1961年, 雄山閣
- (3) 地方史研究協議会編, 1980年, 雄山閣, 奥須摩子「工業発展と市街地の形成—愛媛県今治市の場合—」, 木村礎「東京の下町—その形成と展開—」, 加藤幸三郎「京浜工業地帯の形成」
- (4) 石田寛監修, 1978年, 福武書店
- (5) 山田安彦・山崎謹哉編, 1991年, 大明堂
- (6) 『岡山大学経済学会雑誌』第17巻第3・4号, 1986年
- (7) 同上誌, 第18巻第1号, 1986年
- (8) 同上誌, 第19巻第1号, 1987年
- (9) 『日本地主制成立過程の研究—近畿型地主経営の研究』, 1981年, 福武書店
- (10) 大石嘉一郎編著, 1985年, 御茶の水書房
- (11) 西高月村農会編, 1905年

(岡山県総務部総務学事課主幹)

(『近代岡山県地域の都市と農村』 御茶の水書房 1993年 viii+283ページ)